



**前世で辛い思いをしたので、
神様が謝罪に来ました 4**

ALPHAOLIS

初昔茶ノ介
Hatsumukashi Chanosuke

アルファライト文庫 

ロンズデル

謎に包まれた組織
リベリオンの幹部。
他者を操る能力を持ち、
同じく幹部である
ミシュリーヌの体を
乗っ取った。

ミシャ

気配り上手で
優しいサキの
クラスメイト。

オージェ

サキと同じ
クラスの男子。
友達思いで何事にも
一生懸命。

ヴァン Heim

王都エルトの王様。
魔法の実力は
すごいけど、普段は
怠け者…？

サキ

不幸ばかりの前世を神様に
謝罪され、幼女として
異世界転生した。
桁外れな才能を持つものの、
コミュ障で人見知り。

プレシア

王都エルトのお姫様。
膨大な魔力と
回復魔法の
才能を持つ。

ネル

女神ナーティ様がくれた
サキのお付きの猫。
様々な魔法でサキを
サポートする。
ちなみに女の子。

フラン

アルベルト公爵家の子供。
爽やかで優しいが、
実はちょっと腹黒い
ところも…？

アニエ

魔法学園の生徒。
学年一の魔法の実力者で、
勝負なしっかり者。
ブルーム公爵家の
一人娘。

★ Characters ★
登場人物紹介

私——雨宮咲は、いじめ、虐待、パワハラなど苦しいことばかりの人生を送った挙句、最期は残業帰りに落雷に打たれて一生を終えた。

……はずだったんだけど、神様であるナーティ様が現れて、この不幸な人生はナーティ様の弟であるラスダ様の手違いによるものだったのだと謝ってきた。

そして、私に彼女の管理する魔法の世界——シャルズに転生しないかという提案をしてくれたのだ。

こうして、お詫びとしてたくさんの才能と、頼れる子猫の従魔ネルをもらった私は、サキ・アメミヤとして第二の人生をスタートさせた。

転生後、身寄りのない私を養子として迎えてくれたのは、王都エルトにあるアルベルト公爵家。

当主であるフレル様、その奥さんであるキャロル様、そして二人の子供であるフランとアネットによって……私は生まれて初めて家族の温かさを知ったんだ。今ではフレル様とキャロル様をパパ、ママと呼んでもらっているしね！

それからパパがアルベルト公爵家の家督を引き継いだと同時に、私は正式にアルベルト家の養子として迎えられ、サキ・アルベルト・アメミヤとして貴族家の一員となった。

こんな風に家族に恵まれているんだけど、家族だけじゃなく友達にも恵まれているんだ

よね。
魔法を学ぶために通っている学園では、ブルーム公爵家の一人娘で努力家な赤髪の女の子アニエちゃん、水魔法が得意で青髪とメガネがトレードマークのミシャちゃん、おちよちよいだけど誰よりも元氣な金髪の子オージエと仲良くなつて、毎日すごく楽しいの！

でも、そんなある日、アニエちゃんが消息を絶ってしまった。

アニエちゃんの失踪にいち早く気付いた私たち四人が、彼女の痕跡を追つてたどり着いたのは……なんと、これまで何度か私と対立している国家反逆組織リベリオンの基地だった。

その後なんとかしてアニエちゃんを見つけ出したんだけど、アニエちゃんの両親——ロベルスさんとナタリーさんと戦うことに!?

というのも、彼らはリベリオンに精神操作されていたのだ！

二人はすごく強くて私は負けそうになつたんだけど、アニエちゃんたちが洗脳を解いてくれたおかげで、なんとかみんな無事に帰つてこられた。

だけど今度は、リベリオンの真の目的は王都を大量の魔物の軍勢で攻め落とすことだと判明。私は、王様や貴族家と協力して魔物と戦うことになった。

最初はいけるかなーと思つたんだけど、アニエちゃんを救出する際に魔力をだいぶ使つてしまったせいで戦闘の途中で倒れてしまう。もう駄目かと諦めかけたその時、すごく強い学園の先輩——レオン先輩が助けてくれた。

こうしてなんとか王都には平和が戻つて、私は褒賞として王様から研究所をもらえたの！

リベリオンの攻撃はどんどん過激になってきてるけど、絶対に負けたりしないんだから！

サキ・アメミヤ、今日も幸せ目指して生きています！

1 アニエちゃんのお茶会作戦

王都が襲撃にあつてから半年が過ぎた。気付けば秋になっていて、外の空気は肌寒く感じるほどだ。

でも、私の心はそんな寒さを感じないほどにドキドキしている。
なぜなら、王様に頼んでいた研究所がとうとう完成したから。

これからパパとママ、クールなイケメンのフランと小さくて可愛いアネットと一緒に研

研究所を見に行くことになっていて、今は馬車で向かっている最中だ。

ウキウキと外を眺める私に、ママが話しかけてくる。

「サキちゃん、そんなに目を輝かせながら外を見て……本当に楽しみなのね」

「うん、一人でも行けるように、道を覚えていくの」

私は最近やっと、慣れた人となら緊張せずに話ができるようになった。

それでも急に話しかけられたり、知らない人の前やたくさんの視線が集まったりするとまだ怖かったりするけど……それでも成長は成長だもん！

そんなことを考えていた私の耳に、パパの優しい声が届く。

「サキ、もうすぐ研究所に着くけど、僕とキャロルに約束してほしいことがあるんだ」

私は座り直してパパの方を見る。

「約束？」

「そう。いくつかあるんだけど、聞いてくれるかな？」

「うん……聞く」

私の返事を聞いて、パパは微笑みながら続けた。

「一つ、一人では研究所へ行かないこと。二つ、研究所に泊まったりせず必ず屋敷に帰ってくる。三つ、研究内容をあまり親交のない人に話さないこと。四つ、親しい人に話す場合はしっかりとその人に口止めをすること。守れるかな？」

うわあ、想像以上に多い……。

「どうして一人じゃ、ダメなの？」

それに対して答えたのはママだった。

「サキちゃん、夢中になるとずっとそれに没頭しちゃうじゃない？ そのまま遅くまで帰ってこない心配なの。だから必ず誰かを連れてって」

「私、そんなに周り見えなくならないもん」

頬を膨らませる私に、パパは平然と返す。

「そうなのかい？ ネルはそう言っていたよ？」

私はムツとして抱っこしているネルを見ると、ネルは素知らぬ顔で目を逸らした。

む……私のことそんな風に思っていたの？

私はため息をついてから、パパに向き直る。

「わかった、誰かに行く。それじゃあ親しい人以外に話をしちゃダメなのは、なんで？」

「サキの研究内容は、どれも国に大きな利益をもたらす可能性があるものばかりなんだ。

研究に対してとやかく言うつもりはないし、好きなことを調べてもらっていい。ただ、その内容が流出してしまった場合どうなるかわからないんだ。万が一悪用されたら大変だからね。サキだって、悪い人たちに狙われたくはないだろう？」

パパの言葉に、私は首をぶんぶん縦に振った。

なるほど、そんなことを考えてもみなかった。私の研究ってそんなに価値があるものなのか。

発動したくても、何かしらの欠陥けつかんがあつて魔法として成立しない魔法——魔法まじゅつ難問なんもんの研究とか、まだ誰も作れていない強力な薬の開発とかは、もし成功したら現実世界というノーベル賞をもらえるレベルなのかもしれない。でも……。

「うん、わかった。でもね、その心配はしなくていいよ?」

「あら、どうしてかしら?」

不思議そうな顔をするママに、私は胸を張って言う。

「何かできたら、最初にパパとママに見せるから。そうしたら私のこと褒めてくれるでしょ? その後、人に話していいか聞く」

私の言葉に、ママとパパは顔を綻ほころばせた。

「あらあらあ。何を作ってくれるのか楽しみだわ」

「うん、そうしてくれると助かるし、僕も楽しみだよ」

「えへへ」

すると、アネットとフランも声を上げる。

「お姉さま! アネットもお姉さまの研究が見たいです!」

「僕もサキの研究見てみたいな」

「ふふふ、二人にはお手伝いをお願いするかもね」

そんな話をしているうちに馬車が止まった。どうやら研究所へ到着したようだ。

馬車を降りて顔を上げると、目の前には学園の課外授業で行ったアクアブルムの研究所にそっくりの建物たてがあつた。

王都の建物とは雰囲気ふんいきが違う、金属でできた、入り口が自動ドアの研究所……ここが私の第二の城なんだ!

テンションが上がった私はドアに小走りで駆け寄つていったが、扉が開かずにおでこをドンツとぶつけてしまう。

「いたたた……」

「お姉さま、大丈夫ですか?」

駆け寄ってきたアネットに、私はなんとか笑みを返す。

「う、うん」

アネットから少し遅れてやってきたフランが、首を傾かしげながら聞いてくる。

「扉が開かないのかい? アクアブルムの研究所は勝手に開いたのに」

「むむむ……見た目だけ自動ドア」

「それじゃ意味がないじゃないのです! アネットは勝手に開くドアを楽しみにしてい

ましたのに！」

アネットは、私が前に課外授業の思い出を話した時に、研究所のことをとても熱心に聞いていた。二学年のアネットはまだアクアブルムの課外授業へは行っていないから、私の研究所ができるのをとても楽しみにしていたんだよね。

涙目になるアネットの頭を私が撫でてみると、フランが口を開く。どうやら扉を調べていたみたいだ。

「サキ、自動ではないけど扉は開くようだよ」

「え？」

パパが扉をゆっくりと横にスライドさせる。

「とりあえず中に入ってみたらいいんじゃないかしら？」

ママに言われて全員で中に入る。

入り口から続く廊下は窓がないせいか真っ暗で、ちょっと怖い……。

「あら、サキちゃんは暗いところは苦手かしら？」

「そ、そんなことない……もん」

言ってみたものの、実は真っ暗な場所は得意じゃない。どうしても前の世界の会社で夜遅くまで残業していたことを思い出してしまうのだ。

ついママのスカートを掴んでしまう。

「怖がるお姉さまも可愛いですわ」

そう言うアネットもママのスカート掴んでいるけどね……。

そのまま私たちは奥へ進み、大きな部屋に入る。その瞬間、明かりがついた。

「勝手につかましたわ！」

感動しているアネットの脇を抜け、私は室内を歩き回ってみる。

すると机の上に一枚の紙が置かれているのを発見した。

これは……手紙？

『親愛なるサキ・アルベルト・アメミヤへ。』

言われた通りに研究所は用意できなかったが、それを動かすのに必要な雷の魔石はアクアブルムの研究所のように用意できなかった。ま、そういうこともあるわな。現実はそんなに甘くないことだ。ただ、仕組みはアクアブルムの研究所と同じにしてある。つまり、この研究所を動かしたかったら、自力で雷の魔石を採ってこーいってことだ。以上。皆の憧れの王、ヴァンヘイム・エルトリアス・バイクウエル。

追伸 雷の魔石は貴重で、アクアブルムも最近数が少なくなってきて大変らしいから、そっちには手を出すな。後、この部屋の明かりもしばらくしたらなくなるから気をつけろ』

な、な、何それえ!?

雷の魔石がないとこの研究所が動かないってこと!?

しかも、魔石について一番頼りになりそうなアクアブルムのコネさえも使えなくされ
たし!

だんだんと腹が立つて息が荒くなる。

「むふー……」

そんな私の様子を見て、戸惑ったようにパパが尋ねてくる。

「サキ、どうしたんだい? 鼻息を荒くして」

「……んー!」

私は説明するのも嫌になつて、パパに王様からの手紙を渡す。

パパはそれを読むと、はあ……と息を吐いた。

「サキ、すまない。王様はこういう人なんだ」

「いい……なんとなくわかつてた」

「つてことは、今日は研究所でできることはなさそうだね……」

「うん……」

こうして私たちは結局屋敷に戻ることにした。

帰りの馬車で、私は魔石について考えていた。

魔石がある場所、調達方法、必要な量……うーん、どれも答えが見つからない。

パパなら何か知っているかな?

「パパ、雷の魔石って貴重なの?」

「雷の魔石か……確かに市場にはほとんど出回っていないからな……」

パパは少し考えた後、魔石について説明してくれた。

パパが言うには、魔石は貴族の間で高額で取引されているらしい。

アルベルト家は商業区を治める公爵家だけあって、市場の情報や出回っている商品な
んかを把握している。しかし、裏取引を除いて、アルベルト家と商業ギルドが把握してい
る範囲では雷の魔石は滅多に出回っていないとのこと。

「採掘すれば……いや、雷の魔石が採掘できる場所なんて想像もつかないしな……」

パパはぶつぶつとそう口にして魔石のことを考えてくれているようだ。

すると、ママはふと思いついたように手を叩く。

「そうだ! 魔石のことは残念だったけど、サキちゃん、来週のアレは大丈夫?」

「アレ……? なんのこと?」

「何って、来週はサキちゃんの初めてのお茶会でしょう?」

「……あ」

わ、忘れてたあ！

ママから告げられた現実には、一気に研究所のガツカリ感が吹っ飛んでいって、焦りが生まれたのだった。

「あああああ〜どうすれば……」

「お姉さまから悲鳴みたいな声が漏れてますわ……」

初めてのお茶会を次の日に控え、私は自室で頭を抱えていた。

アネットが心配そうにしているのも気にならないほど、私の心境は焦りでいっぱいだ。

そもそもお茶会ってなんのためにあるの？ お互いの顔を覚えてもらうため……とか？

私は震える声でフランに尋ねる。

「明日はどういうお茶会なんだっけ……?」

「王様主催の、王族、公爵家の子供たちのお茶会だね。二月に一度、王様は子供たちが集

まる場を設けているんだ。公爵家の中では重要な催しで、レオン先輩はパウアにいたのに

これに参加するためにわざわざ呼び戻されたっていう噂だよ」

何それ怖い……ずる休みっていう手も使えないみたいだね……。

フランの言葉に再び頭を悩ませていると、部屋の扉がノックされた。

「サキ、アニエスだけど」

「アニエちゃん？ どうぞ」

私の返事を聞いて、アニエちゃんが部屋に入ってくる。

「ああ、やっぱり明日のことで悩んでいるのね」

「うん……私、どうしたら」

私は涙目でアニエちゃんを見つめる。

研究所が手に入り、研究したいテーマもたくさんある。これからは楽しいことばかりだ

と思っていたのに……いたのに……。

あれも、これも、全部あの王様のせいであらう！

なんかもう、王様にちよっと腹が立ってきたよ。

やりたいことが全て、王様によって妨害されている気さえしてくる。

でも、腹を立てても現状は変わらない。

とにかく明日、初めて会う公爵家の人たちに失礼のないようにしないと……。

そんな悲しい決意を固め始める私に、アニエちゃんは明るい声で言う。

「サキ、心配しないで！ 私に考えがあるの」

「かん……がえ?」

「ええ、これならお話が苦手のサキも大丈夫よ！ 今日来たのはその秘策をサキに伝える

ためよ！」

ああ、アニエちゃんが女神様みたいに見える……やっぱり持つべきものは友達だよお。その後、アニエちゃんの作戦をもとに、私たちは明日のお茶会へと備えるのだった。

そして次の日。

私とフランとアネットは馬車に揺られてお茶会の会場へと向かっていた。お茶会は王城の中の庭園で行われるらしい。

実は、このお茶会にはルールがある。

それは、大人はついてこれないというルールだ。

それにどういう意味があるのかはわからないけど、パパは「こんな時くらい大人に邪魔はさせねーぞって感じじゃないかな？」と言っていた。

「お姉さま、大丈夫ですか？」

「ただだ、大丈夫だよ」

アネットの心配そうな声になんとか返事したけど……舌がうまく回ってくれない。

そんな私の様子を見て、フランは気楽に笑っている。

「ははは、全然大丈夫じゃなさそうだね」

む……笑いごとじゃないのに……！

でも私にはアニエちゃんが授けてくれた秘策がある。あの作戦は完璧だと思う。という

か、思いたい。

大丈夫、ちゃんと効果があるか試したし、後は頑張るだけだもん！ 私とフランが……。

ああ、でもできることならこのまま王城に着かないで……。

そんな私の祈りも虚しく、馬車はあつという間に王城に到着してしまっただった。

「本日はようこそお越しくださいました」

王城に到着すると、メイドさんが迎えてくれる。

さすが王城に勤めるメイドさん……すらつと伸びた背筋に、綺麗なストレートの髪が似合う美人さんだ。私のお付きのメイドさんであるクレールさんも綺麗だけど、どっちかといえは可愛いつて感じだし、タイプが違う。

「本日はお招きいただき、感謝いたします。アルベルト家長男、フラン・アルベルト・イヴェールです」

「今日を楽しみに、日々を過ごしてまいりました。アルベルト家長女、アネット・アルベルト・イヴェールですわ」

フランは右手を自分の胸に当て、アネットはドレスのスカートを少し上げながらお辞儀をした。

「お招きいただき、嬉しい……です」

綺麗に挨拶をする二人に対して、やはりごちない私。

えっとお……招いてもらって嬉しいですーみたいな言葉の後にえっと、えっとお……。

「サキ、自分を言わないと」

小声でフランに言われて、私は慌てて付け足す。

「アルベルト家養子の、サキ・アルベルト・アメミヤ……です」

慣れていない様子を察したのだろう。メイドさんは私の不慣れた挨拶をしつかりと聞いてから、頭を深く下げた。

「ご丁寧にありがとうございます。私はメイド長のミアアナと申します。それではこれから会場にご案内いたしますので、こちらへどうぞ」

私たちはミアアナさんについていく。

うう、フラン……様子見なんてしないで、今、例の作戦を実行してもいいんじゃないの……？

そんな思いを込めた視線をフランに送るけど、綺麗なウイंकが返ってきただけだった。

そうこうしているうちに、会場である庭園に着いた。

「では、こちらでもうしばらくお待ちください」

「案内、感謝します」

フランの返事にミアアナさんはお辞儀をして、来た道に戻っていった。

周りを見ると、さすが王城の庭園だけあってとても綺麗だ。

いろいろな花や整えられた草木に、遠目でもわかる高そうな長机と高そうな椅子が囲まれている。

そして、その椅子の一つにアニエちゃんが座っていた。

アニエちゃんもこちらに気付いたようで、立ち上がって歩いてきた。それに対して、フランが背筋を正してお辞儀をした。

「ご機嫌よう、アニエ。本日はお日柄もよく……」

さつちりとした挨拶をするフランに対して、鬱陶しそうに手をしっしとやりながら、アニエちゃんは言う。

「あー、いいから私にそういうの。サキやアネットちゃんならともかく、フランにされても真面目さを感じないもの」

「それはひどいなあ。貴族家としてちゃんとしようと思っただけなのに。少し落ち込むよ」

「お兄さま、落ち込んでいる顔に見えせんわ」

アネットが言う通り、フランの顔はニコニコとしている。

そんなフランを見て軽くため息をついた後、アニエちゃんは私の方を向く。

「サキ、公爵家の子供の中じゃフランが一番性格悪いから、他の人に緊張しなくて大丈夫よ」

安心できる情報じゃないけど……むしろ作戦に支障ししょうが出そうな情報なんだけども、アニエちゃんが私のことを気にかけてくれているのは嬉しい。

しかし、当のフランはどこ吹く風だ。

「そんなことないさ」

「あるわよ。自覚がないところが一番たち悪いの」

そんなアニエちゃんのツッコミを聞きながら、私たちは席につく。

私の右にアネット、左にアニエちゃん、向かいにフランが座るといって完全に私を守るスタイルだ。

それからしばらくお話をしていると、足音が聞こえてきた。

その足音に私たち全員が反応する。

「誰か来たわ！ フラン、準備はいい？」

アニエちゃんの掛け声に、フランが応える。

「もちろんさ。第2ダクネ！」

フランが私に闇魔法をかける。

すると、それに対して私の精神耐性スキルが発動する。精神耐性スキルによって私の精

神は普段より落ち着いた状態になっていく。

そう、アニエちゃんの作戦とは、フランが私に闇魔法をかけて、それに反応した私の精神耐性スキルの効果でお茶会を乗り切るといふものだった。

ネルに確認したところ、私の精神耐性スキルは緊張や人見知りといった軽いストレスには反応しないが、他人から精神攻撃を受けた際には、その技を弾はじいた上で一定時間、強制的に精神を安定させる効果があるらしい。

その作用を利用して、緊張や人見知りをなくそうという狙いなのだ。

ちょうどその効果が出てきたのを感じたあたりで、庭園の入り口に人影が見えた。

私は挨拶のために立ち上がる。

「やあ、サキ」

「なんだ。レオン先輩か」

気合を入れて立ち上がったのに、いつも学園で会うレオン先輩だったのでちよつと拍子ひょうし抜けしてしまった。

「なんだとはひどいなあ。君の憧れの先輩だろう？」

「先輩ですけど、私がいつ憧れているなんて言いましたっけ？」

「……？ サキ？ 本当にサキだよね？」

「はい、あなたの可愛い後輩のサキですよ」

いつもなら少し話すだけで緊張してしまう先輩相手でも、精神耐性発動中の私ならこんな冗談だって言えちゃうのだ。

それを見てレオン先輩はすっごく困った顔をしている。

これはこれで面白いね。あのレオン先輩に一泡吹かせてやった気分だ。

「レオン、何固まっているんだ」

私が内心喜んでいると、レオン先輩の後ろから声が聞こえてくる。レオン先輩が一步横に移動すると、そこにはレオン先輩に負けず劣らずのイケメンが立っていた。

どことなくレオン先輩に似ているけど、髪形が違う。

先輩と同じ黒髪だけど前髪を後ろに流して、全体に少しウェーブがかかっている。身長もレオン先輩より少し高いかな？

「ああ、ごめん兄さん」

お兄さん？ じゃあこの人がクロード家長男、レガール・クロード・ライレン様か。

噂程度でしか知らないけど、クロード家にしか伝わらない剣術を歴代クロード家で最年少で体得したとかなんとか。

魔法のセンスがずば抜けているレオン先輩とは対照的に、体術においてレガール様の右に出る者はいないと言われているのだと、前に学園で誰かから聞いた気がする。

年齢はレオン先輩の二つ上だったかな？

そんなことを考えている私の横から、アニエちゃんがレガール様に挨拶した。

「レガール様、こんにちは」

「ん？ ああ、アニエスカ。何やら大変だったようだな。なんでもリベリオンに攫われていたとか」

「ええ、でもこうして両親や友達のおかげで無事に戻ってこられました」

「そうか。とにかく無事で本当によかったよ」

二人の会話が一段落したタイミングで、アネットが声を上げる。

「レ、レガール様！ ご機嫌よう！」

あのアネットがガチガチに緊張してる!?

何？ レガール様に何かあるの!?

「アネット。相変わらず元気だな」

「はいですわ！ レガール様！ また今度私に体術の稽古をつけてください！」

ええ!？ アネットって、レガール様に体術を習っていたの!?

でも、言われてみれば、私がアネットに魔法を教えることはあっても、体術を教えたこととはなかったかも……模擬戦の時に、体の動きがやけにいいから気にはなってたんだよね。

「ああ、ではまた時間ができた時に」

「はいですわ！」

「フラン、君もその時はぜひ。最近面白い武術を特訓していると聞いたぞ」
 「そんな、レガール様に見せられるほど上達していません。サキに比べればまだまだです」

フランがそう言うのと、レガール様は私の方を見る。
 確かに最近フランには弓と体術を組み合わせた戦い方を教えている。レガール様はそれをどこかで聞いたかな？

あ、挨拶しないと。

「お初にお目にかかります、レガール様。このたび、フレル様のお心遣いによりアルベルト家の養子になりました、サキ・アルベルト・アメミヤと申します。よろしくお願ひいたします」

私は先ほどのアネットのお辞儀を真似て、スカートの端を少し上げて頭を下げる。
 緊張していないと、こんな綺麗な挨拶だつて余裕だ。

すると、レガール様も右手を胸に当て、お辞儀を返してくれた。

「こちらこそ。僕はレガール・クロード・ライレン、レオンの兄だ。君が、アクアブルムの英雄か。噂はかねがね聞いているよ。レオンからも、他のところからもね。君も変わった武術を体得していると聞いている。ぜひ、今度手合わせ願ひたい」

「ええ、ぜひ。私もレガール様の噂をお聞きしておりました。ぜひ、私にも稽古をつけて

いただきたいです」

ニコニコしながら答えると、レガール様も微笑み返してくれた。

この人、大人！ 一緒にいて落ち着くタイプのイケメン！

こういう人は真面目で、きつと休日は庭で読書とかしちゃうんだろぅな〜！

横にいるレオン先輩は、まだ驚きと恐怖が交ざったような表情をしている。

レオン先輩、何その顔！ そんなに私が普通に話してるのが変に見えるの？

すると、二人の後ろから鈴がすような綺麗な声が聞こえてきた。

「ちよつと、クロード兄弟。邪魔よ。早くどきなさい」

レガール様の後ろには、綺麗なドレスを着た、明るいブラウンのウェーブがかかった髪を揺らす女の人と、その女の人と同じ髪の色の子が立っていた。

「ああ、メイリーか。すまない」

「まったく、何か面白いものもあるの？」

「いや、少し挨拶をね」

「挨拶？ つてああー！」

レオン先輩とレガール様の間に割って入ってきた女性は、私を見ると大きな声を出した。
 「あなた！ アクアブルムをクラークンから救った英雄サキでしょ!？」

すごいハイテンションで声をかけられたけど、たぶんお会いしたことないよね……？

「え？ あの、どちら様でしょうか……？」
 メイリーと呼ばれていた女性は、目を輝かせて私の前に来ると、私と視線を合わせるようにしゃがんだ。

「私はメイリー。メイリー・カルバート・ハレアス。今日はあなたに会えるって聞いて楽しみにしていたの！」

勢いに押されてちよつとたじろいだが、よく見るとすごく美人さんだ。

しかも、髪をふわりと揺らしながら楽しそうに喋る姿からは天真爛漫な雰囲気が出ていて、親しみやすい。

そう言えば、農畜区を預かるカルバート家の長女、メイリー様は現公爵家の子供の中で最も魔力量が多いってパパが言っていたような……。

「そ、それはありがとうございます。改めまして、私はアルベルト家の養子になりました、サキ・アルベルト・アメミヤといいます」

「ええ！ 噂は聞いているわ！ ああ、私の可愛い妹がまた一人増えたわ！」

へ？ 妹？

その言葉に、レガール様が呆れた声を出す。

「メイリー、まだそんなことを言っているのか」

メイリー様はしゃがんだまま、レガール様の方を向く。

「何よ、私たち公爵家は仲良くするべきと王様が言ったのよ。これから先、長い付き合いになるんだから兄弟姉妹のようにしなさいと。つまり、上から二番目の年の私は、みんなの長女ということよ。よろしいかしら？ レガールお・に・い・さ・ま？」

「誰がお兄様だ」

そんな二人の間に入ったのは、レオン先輩だ。

「まあまあ、兄さんも姉さんも落ち着いて」

「レオン、だいたいお前が姉さんなどと呼んでいるから、調子に乗るんだ」

「ええ？ 僕のせい？」

メイリー様はレガール様の一つ下の年齢だそう。きっと小さい頃から一緒にいるんだろうな。幼なじみみたいな感じだったのかな。

メイリー様はレガール様とレオン先輩を放っておくと、私に向き直る。

「ということ、今日から私はあなたの姉になったも同然よ。仲良くしてくれると嬉しいわ」

そう言って微笑むメイリー様は天使のような綺麗さで、なんとというか甘えなくなるオーラが出ていた。

ママとは違う雰囲気……これが姉力か……。

「はい、お姉ちゃん」

「お姉……ちゃん？」

私の言葉にメイリー様が固まる。

はっ、ついメイリー様の姉力に引っ張られて、「お姉ちゃん」とか言っちゃった!?

こんな公爵家新人の私が、様もつけずに「お姉ちゃん」と呼ぶなんて調子乗ってると思われる!?

そう思って口を押さえたけど、返ってきた反応は予想外のものだった。

「か、可愛い〜!」

言いながらメイリー様は私にぎゅっと抱きついてきた。

「私、お姉ちゃんと言われるのが憧れだったのよ! お姉様や姉さんじゃなくて、『お姉ちゃん』がよかったの!」

「姉貴、いい加減にしろよ」

嬉しそうに私を抱きしめながらくるくる回るメイリー様の横から、冷たい声が聞こえた。

しかし、メイリー様はからかうように笑う。

「何よ、リック。嫉妬しているの?」

「はあ!? するわけねーだろ!」

リックつてことは、あの男の子がカルバート家長男のリック・カルバート・ハレアス様か。

確かアネットと同一年だ。

メイリー様に愛でられながらリック様を見ると、リック様はアネットの方へと視線を向けた。

「よう、アネット」

「ええ、リック。ご機嫌よう」

二人の声にはどこか棘がある。

え? 何この雰囲気? 二人って仲悪いの?

そんなことを考えていると、そつとフランが私に耳打ちした

「二人はライバルみたいにいつも張り合っていてね。仲は悪くないと思うんだけど……」
 なんだ、ライバルか。いつもニコニコのアネットにそんな存在がいるなんてちよつと意外かも。

でも、確かに魔法の特訓の時とか結構悔しがっていたし、負けず嫌いだもんね。

アネットは挨拶の後、イライラした口調のまま続ける。

「公爵家だというのに、ちゃんとした挨拶ができないんですの? レディに対してそのような不躰な挨拶をして」

そんなアネットに、リック様も負けじと小馬鹿にした態度で応戦した。

「レディにはちゃんとやってるよ、レディにはな」

うわあ、バチバチだなあ。最近アネットから授業で調子が良いって報告されることが多かったけど、それもリック様と張り合ってるからかなあ。

すると、後ろから素っ頓狂な声が聞こえる。

「お前ら、何してんだ？ 入り口で固まって」

声のした方を向くと、いつの間にか王様が少し呆れ顔で立っていた。お話しに夢中で全然気付かなかったよ……。

私たちは王様に挨拶をしてからそれぞれ席につく。

それからしばらくして、目の前に美味しそうな料理が運ばれてきた。

料理が運ばれている間はみんな静かにしている。

王様の方を見ると、横には男の子と女の子が座っていた。

男の子の方はアネットやリック様と同じくらいの年かな？ 女の子の方はもう少し下に

見える。たぶん、男の子が第二王子のウィルヘイム様。女の子はお姫様のプレシア様かな。

あれ？ でも第一王子がいない……？

私は王様に尋ねる。

「王様、今日はエルヘイム様はいらっしゃらないんですか？」

「ああ、エルのやつは今日はフィリスのときだ。まあ、エルもフィリスも真面目だから

なあ。たまには息抜きしなきゃいけないってのに」

第一王子のエルヘイム様は王妃のフィリス様のところか。お会いしてみたかったのに、お仕事かな？

それにしても王様……言っていることは正しいかもしれないけど、王様はいつも息抜きばかりしてるってパパが愚痴っていたよ。

ほどなく料理が揃い、王様はみんなに向かって話し始める。

「さて、料理も揃ったことだし始めようじゃねーか。まずは報告からだ。最初にここにいるサキの話をしたいと思う」

え？ 私？

驚く私を置き去りに、話が始まる。

「こいつはアルベルト家の養子として、新たに公爵家に名を連ねることになった。皆に負けることのない才能と技術を持った者だ。互いに切磋琢磨せよ」

おぉー王様っばい！ いつもの気の抜けた感じとちがーう。

「では、サキ。皆に挨拶を」

「え？」

挨拶!? 何それ、そんなの聞いてない！

あ、なんか王様がニヤニヤしてる!? 私に無茶振りして面白がつてるな!?

でも、甘かったね。今日の私は一味違うんだから！
私は立ち上がって一礼する。

「先ほどご挨拶をさせていただいた方もいらつしやいますが、改めてご挨拶いたします。このたび、アルベルト家養子となりました、サキ・アルベルト・アメミヤです。栄光あるこの国の公爵家として、皆様と共に名を連ねられることを誉れに思っています。ただ、皆様と違い、私は元々平民。才があるうと、公爵家としての品位やしきたりについては至らぬところばかりでしょう。此度のこの茶会という機会を大切に、学ばせていただきたく存じます。今後ともよろしくお願いいたします」

私は再び一礼し席に座ってから、王様にドヤ顔する。

ふふふ、驚いた表情しちゃって。それに悔しそうだね。

これは研究所の魔石のお返しなんだから。

私の挨拶の後、みんなで食事をいただくことになった。

通常のお茶会は文字通り紅茶やお菓子を嗜むものだけど、このお茶会は食事会のようなものらしい。

運ばれてきた料理はさすが王城のシェフが作るだけあってどれも美味しい。何が入っているのかわからないけど、高級な味がする！



食事をしながら、王様はみんなからの近況報告を聞いている。

「メイリー、前に言っていたブルーグレイの品種改良とやらはどうなったんだ？」

今報告をしているのはメイリー様のようだ。メイリー様は得意げに答える。

「王様、品種改良をして、すぐに物ができるわけではないのですよ？ 植物は生き物なので、すぐから」

「そうなのか？ じゃあできたらずぐに俺のところを持ってこい！ お前のところの果物はどれもうまいからな！」

「ふふふ、収穫時期が来たらすぐに持っていきますわ」

そう言って笑うメイリー様。

そうか、カルバート家は農畜を預かる公爵家。果物や野菜、小麦なんかを作っているのかな？

いいなあ、私にも果物を作ってくれないかな？ 私の【収納空間】の中にある、ネルの情報をもとに作った苺とか。

そんなことを考えていたら、レガール様とレオン先輩が王様から話を聞かれる番になっていた。

「お前ら、魔法と剣術の調子はどうだ？ 兄弟で得意なものが違うからそれぞれ教え合えんだろ？」

「それが王様、レオンは最近剣術ではなく、魔術や他の分野に精を出しているので、僕の練習相手がおらず困っているんですよ」

「いやいや、そんなことないですよ。そもそもこれまで一日四回も訓練をしていたのがおかしいんです。今でも一日に二回は手合わせをしていますから」

ええ!? そんなに訓練しているの!?

レガール様とレオン先輩は仲がいいんだなあ。

でも、体術の腕が立つレガール様を相手に訓練をしていたなら、私が教えたネル流武術をすぐにもものにできたのも納得できる。

王様との話を聞いていると、みんなのことがわかるのでとてもありがたいなあ。そんな風に他人事のように思っていたら、王様は次に私の方を見た。

「サキ、研究所の魔石はどうなった」

なんか楽しそうな表情がちょっとむかつく。

「このお茶会に関して気を揉んでいましたので、何も思いついていません」

「そう言うと思つてな、新しい魔石採掘ができる場所の情報を集めといた」

「え?」

何その情報!? 欲しい……。

雷の魔石じゃなくても、いろんな魔石があれば研究の幅が広がるし。

「あ、その情報なら私も……うぐむ!」

メイリー様が何か言おうとしていたみたいだけど、王様に口を塞がれている。でもごめん、メイリー様、今は王様の情報の方が大事なの! 早くその情報をちょうだい!

「早く聞かせろって顔してんな。だがなサキ、物事つてのはそんなに甘くない。欲しいものがあつたらそれ相応の働きをしないとな」

「つまり、私に何かしてほしいことがある……と?」

「そうだ。なあに、大したことじゃない。詳しい内容は後で教えてやる。どうだ?」

内容の説明もせずに、先に条件を呑むって言う言質を取りたいってこと? 何それ! 半分ぐらい詐欺じゃん! でも魔石の情報は欲しいし……うう。

さてはこうなることを見越して、魔石を用意しなかったんじゃないの?

「どうした? ちなみに、この情報が出回っているのはごく一部だ。なんならお前が行きたい時に探掘許可を出せるようにしてやるぞ」

「だからその許可も私の家で……ぐむむむ!」

メイリー様、後にして!

しかしどうしよう……?

さすがにまたリベリオンと戦わせるようなことはしないとと思うけど、条件の内容がわからないって怖すぎる。でも、魔石への手がかりが一切ないんだよなあ……。

「わかりました。後ほど詳細をお教えください」

「よおし! 交渉成立だ。詳細を説明する時に情報も渡そう」

「はい」

ああ、何をやらされるんだろう。

口ぶりから、あんまりいいことだとは思えないなあ……。

「そんなことより、お前そんなスムーズに話できたっけか?」

王様が急にそんなことを言い出すので、私はドキッとした。それも一瞬で精神耐性によって収まったけど……。

でもここで作戦がばれると、アニエちゃんがせっかく考えてくれたのに無駄になっちゃう!

「それはどういう意味ですか?」

王様の言葉を不思議に思ったのか、レガール様が王様に聞いている。王様は眉をひそめて私の方を向く。

「いや、こいつ、人と話す時だいたい……」

その先を言わせまいと、アニエちゃんが言葉を遮ってくれる。

「あーあー! 王様! 前にパパが王様に本当に感謝したいと言っていましたよ?」

「ん? ああ、ロベルスのやつは生真面目だかな。気にすんな、今後の働きに期待して

ると言っとけ」
「は、はい」

アニエちゃんがなんとかごまかしてくれた。

私が涙目で感謝の視線をアニエちゃんに向けると、ウィンクが返ってくる。
やっぱり持つべきものは頼りになる友達だよ！

その後はアニエちゃん、フラン、アネットのアシストもあつてお茶会は何事もなく終了し、私はなんとか無事屋敷に帰り着いた。

自分の部屋に入り、安心した私はベッドにポフッとダイブする。

「ああ……もう疲れたよ」

するとネルが言葉を介さず意思疎通する魔法——【思念伝達】で労ってくれる。

「サキ様、お疲れ様です」

「うん。でも、公爵家の人たちはみんな優しそうでよかったよ」

「そうでしたか。精神耐性はうまく発動していたようですね」

「そうだけど……いつまでもフランに頼るわけにもいかないし、何か策を考えないと」

はあ、王様の頼み事や今後のお茶会対策、魔石に研究所に……考えなきゃいけないことが山積みだ。

でも、こんなにいろいろ考えているのは森にいる時以来かもしれない。

忙しいのは大変だけど、なんだか楽しくもある。

私はそんなことを考えながら、お茶会の疲れと緊張から来る睡魔に、なす術なく負けてしまうのだった。

立ち読みサンプル はここまで

2 王様の頼み事

お茶会の次の日。

私は王様からの呼び出しで、王城に向かっていた。

ネルを腕輪に変身させて連れてきてはいるが、一人で出歩くのは未だに怖い。

私は馬車の中で大きくため息をついていた。

「ネル、私、何させられるんだろう」

『グリーリアの王の考えは私にも予想が付きません。無茶なことは言わないでしょうが、魔石の採掘場に関する情報の価値はかなりのものかと思えます。それに見合う働きだと考えると……』

「もう、いつもそうやって私を不安にさせようとするんだから」